

第六回

みなかみ町俳句短歌大会

作品集

俳句の部

27 人 123 句

※順位について同点の場合は投稿順を優先しました。

※一人の投稿者の受賞は一賞に限定しました。

※入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

※太字は入賞入選作品です。

【最優秀賞】 8点

今日も干す大根に日の匂ふまで

平井 登志絵

【入選】 5点

感声を闇に戻して花火果つ

北 雲

【優秀賞】 7点

無器用に生きて老後の菊づくり

阿部 伊亨

【入選】 5点

名のみなる城址入口鴟日和

角田 勝子

【優秀賞】 6点

岳からの風すぢ抜ける稲架襖

林 恵美子

【入選】 5点

就活の孫内定や新酒酌む

澁谷 典子

【入選】 6点

熊鈴のシャンシャンはずむ通学児

春 石

【入選】 5点

月ひとつガザにも照らす十三夜

関 和子

【入選】 6点

秋深む米寿となりて想ひ多々

津 恵 女

【入選】 5点

乱れ咲く小菊の庭の佇まひ

酒井 富子

【入選】 5点

冬空を射貫く姿や耳双つ

杉木 輝夫

【入選】 5点

秋深し語る楽しさ趣味の友

林 道子

【入選】 4点

酌み交わす竹馬の友とぬくめ酒

原澤 芳雄

【入選】 3点

目貼りしてしばし浮世を見つ聴かづ

翠 華

【入選】 4点

岳よりの風をたのみに柿吊す

長浜 利子

【入選】 2点

棟梁の育てし焚火人だかり

遠藤 長代

【入選】 4点

新蕎麦や思わず句書く箸袋

番場 正夫

【入選】 2点

名月や米寿祝いのカード来る

林 好一

【入選】 4点

冬に入るほどよき一人暮しかな

山田 高江

【入選】 2点

問はれれば話し込みたる菊花展

益子 桂子

【入選】 3点

音も無く季を連れてくる秋時雨

三池 幸子

【入選】 1点

懐かしや三世の夕食長き夜

林 明男

【入選】 3点

遊ぶ子も無き公園に石路の花

高橋 基一郎

【以下、投稿順に掲載】

- | | | | | | | | |
|----|----------------|----|-----|----|-----------------|----|----|
| 1 | 熊ニユース今日も列島駆け巡る | 原澤 | 芳雄 | 19 | 行く秋や裾長々と赤城山 | 杉木 | 輝夫 |
| 2 | 秋灯火パソコンたたくメ切日 | 原澤 | 芳雄 | 20 | この郷も嬬天下や豊の秋 | 杉木 | 輝夫 |
| 3 | 鉄橋を渡る電車や山粧う | 原澤 | 芳雄 | 21 | 熊騷動柿の木に巻くトタンかな | 杉木 | 輝夫 |
| 4 | 酌み交わす竹馬の友とぬくめ酒 | 原澤 | 芳雄 | 22 | 吾が干支やたくみの里の藁の午 | 杉木 | 輝夫 |
| 5 | 冬銀河輝やき増せる君の星 | 原澤 | 芳雄 | 23 | 冬空を射貫く姿や耳双つ | 杉木 | 輝夫 |
| 6 | 取れ高と需要の絡み今年米 | 林 | 明男 | 24 | しぐるるや駅で手を振るおさげ髪 | 遠藤 | 長代 |
| 7 | 懐かしや三世の夕食長き夜 | 林 | 明男 | 25 | 嘆くたび柿の実色を深めたる | 遠藤 | 長代 |
| 8 | 熊出没仰ぐ未曾有の自衛隊 | 林 | 明男 | 26 | 三分が又五分延ぶ蒲団中 | 遠藤 | 長代 |
| 9 | 蔓引かばをちこち動く真葛原 | 林 | 恵美子 | 27 | 棟梁の育てし焚火人ばかり | 遠藤 | 長代 |
| 10 | 岳からの風すぢ抜ける稲架襖 | 林 | 恵美子 | 28 | 黄落や昼を灯して喫茶店 | 遠藤 | 長代 |
| 11 | 霜月の雪に谷川岳仮眠かな | 林 | 恵美子 | 29 | 感声を闇に戻して花火果つ | 北 | 雲 |
| 12 | 男体山きは立たせてや谷紅葉 | 林 | 恵美子 | 30 | 虫時雨消えて深まる闇の底 | 北 | 雲 |
| 13 | 曾孫はや五歳と三歳千歳飴 | 林 | 恵美子 | 31 | 熊狂う山は異変かくれ惑う | 北 | 雲 |
| 14 | 尉鷓ことしも来たよと声とどく | 三池 | 幸子 | 32 | 病む地球や熊狂いたつ愁思かな | 北 | 雲 |
| 15 | 愛らしき金柑守る刺の数 | 三池 | 幸子 | 33 | かじか鳴き水韻の音も行き暮れる | 北 | 雲 |
| 16 | 野に隠れ茶花にうるわし杜鵑草 | 三池 | 幸子 | 34 | 人里にひもじき子熊餌あさる | 長浜 | 利子 |
| 17 | 音も無く季を連れてくる秋時雨 | 三池 | 幸子 | 35 | 幾人の命奪ひて熊穴に | 長浜 | 利子 |
| 18 | ひっそりと染めの店先藍の花 | 三池 | 幸子 | 36 | ラグビーのボールと見まごふ甘藷 | 長浜 | 利子 |

37	岳よりの風をたのみに柿吊す	長浜	利子	55	秋の夜きのうも聞いたと妻の声	春	石
38	長老の白慢話や菊花展	長浜	利子	56	熊の事話しは尽きず夕べかな	春	石
39	頬なげる程よい風や秋深む	高橋	基一郎	57	この秋のあの道この道けもの道	春	石
40	卒寿越え四恩しみじみ小春日和	高橋	基一郎	58	熊鈴のシャンシャンはずむ通学児	春	石
41	緑陰に一人憩えば風の声	高橋	基一郎	59	黄落の公園をゆく車椅子	角田	勝子
42	山茶花にやさしき光り今朝の風	高橋	基一郎	60	夢拾ふ如く団栗また拾う	角田	勝子
43	遊ぶ子も無き公園に石路の花	高橋	基一郎	61	持たす物何もなきとて柿三つ	角田	勝子
44	喉越しに思わず一句はしり蕎麦	番場	正夫	62	名のみなる城址入口鴨日和	角田	勝子
45	茅葺きに熟し落ちるや秋の暮れ	番場	正夫	63	小さき匙そへて熟柿見舞かな	角田	勝子
46	新蕎麦や思わず句書く箸袋	番場	正夫	64	風やんで時雨の夜は大根煮	津	恵女
47	皺くちやな黒い手が盛る今年米	番場	正夫	65	ひとり居や金木屋の香に籠る	津	恵女
48	秋深し閉校の庭じつと見る	番場	正夫	66	秋深む米寿となりて想ひ多々	津	恵女
49	田終ひの煙田を這ふ星明り	平井	登志絵	67	時雨るるや我に似てくる泣き羅漢	津	恵女
50	島渡る生命見送る明けの空	平井	登志絵	68	綿虫や純白の柩にいつの日か	津	恵女
51	今日も干す大根に日の匂ふまで	平井	登志絵	69	立冬の色におちつく檜木立	山田	高江
52	もぎ取れば手に朱の満つる熟柿かな	平井	登志絵	70	湯豆腐や父のこだわりよみがえる	山田	高江
53	裏を見せ表を見せて降る落葉	平井	登志絵	71	冬に入るほどよき一人暮しかな	山田	高江
54	今朝の秋つくばひの水ころころと	春	石	72	毎朝の安否確認冬に入る	山田	高江

73	力投を思い見上げる後の月	イ	マ	ミ	ツ	91	小雨降る秋海棠に愁ひあり	阿	部	伊	亨	
74	美術展初の公欠ほくそ笑む	イ	マ	ミ	ツ	92	老僧や蚊に刺されつつ木魚打つ	翠		華		
75	香ばしい海老のしっぽと新蕎麦と	イ	マ	ミ	ツ	93	背を丸め行く旅人や空つ風	翠		華		
76	冬の朝かすかに動くメスの蜂	イ	マ	ミ	ツ	94	目貼りしてしばし浮世を見つ聴かづ	翠		華		
77	サンルーム足裏冷り冬の朝	イ	マ	ミ	ツ	95	暁の宍道湖夫婦蜩舟	翠		華		
78	赤々と萌え咲く鶏頭花壇終焉	林		好	一	96	杣小屋に舞茸盛らる籠が座す	翠		華		
79	名月や米寿祝いのカード来る	林		好	一	97	朝いちに見えない香り金木屋	関		和	子	
80	故郷の紅葉便りか坤六路	林		好	一	98	月ひとつガザにも照らす十三夜	関		和	子	
81	知る人ぞ訃報の便り秋短し	林		好	一	99	映像はがれきばかりの戦地に冬	関		和	子	
82	バナナ食べ夜半の句作冬至かな	林		好	一	100	秋の花絵筆の水をきつてをり	久	野	と	し	華
83	胸の内触れず語らず秋灯下	澁	谷	典	子	101	つるなしのやはらかいんげん今朝のぜん	久	野	と	し	華
84	就活の孫内定や新酒酌む	澁	谷	典	子	102	馬鈴薯のゑくぼ可愛いや男爵か	久	野	と	し	華
85	三代が支え会う日々今年米	澁	谷	典	子	103	乱れ咲く小菊の庭の佇まひ	酒	井	富	子	
86	大谷の受賞ラッシュや天高し	澁	谷	典	子	104	北風や谷川岳の荒れ模様	酒	井	富	子	
87	好天に恵まれ区民秋祭	澁	谷	典	子	105	一年の丹精ならぶ菊花展	酒	井	富	子	
88	測定し牛連れ返る牧の秋	阿	部	伊	亨	106	庭に花瓶に香りあふるる小菊かな	酒	井	富	子	
89	無器用に生きて老後の菊づくり	阿	部	伊	亨	107	青天へ金賞ほこる菊の花	酒	井	富	子	
90	秋天を突いて連なる秋田杉	阿	部	伊	亨	108	秋うらら庭のコスモス眺めおり	林		道	子	

109	老いてなほ読書漬けなり灯火の夜	林	道子
110	好物は熊と同じよ秋の幸	林	道子
111	秋深し語る楽しさ趣味の友	林	道子
112	紅葉狩り熊の出没恐れつつ	林	道子
113	長き夏短かき秋や寒さ近し	菜	花
114	山里は熊の被害の大きく出る	菜	花
115	明日雪の降るあり予報寒さ増す	菜	花
116	鱚雲もの捨つるとふ旅仕度	佐藤	美智子
117	子育地蔵はだしに存す草紅葉	佐藤	美智子
118	兎の耳ぴくり入日の寺鐘かな	佐藤	美智子
119	良日や山のチャペルの薄紅葉	益子	桂子
120	立冬や赤城嶺すくと茜空	益子	桂子
121	白足袋や寄寄屋草履でふみ出せり	益子	桂子
122	ふくろうの顔のくるりと後ろ向き	益子	桂子
123	問はれれば話し込みたる菊花展	益子	桂子

短歌の部

51 人 241 首

※ 順位について同点の場合は投稿順を優先しました。

※ 一人の投稿者の受賞は一賞に限定しました。

※ 入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

※ 太字は入賞入選作品です。

【最優秀賞】 15点

売られたる子牛を呼びて親牛は梅雨の一夜を鳴き
明かすなり
菜 花

【優秀賞】 14点

妻に云う最後の「嘘」になるだろうもうすぐ家に
帰れるからな
石崎 正次

【優秀賞】 11点

一つずつ七つの色を言えるほど美しき虹立つ秋の
夕暮れ
角田 勝子

【入選】 9点

学び舎の最後となりし運動会少子化の波母校呑み
込む
番場 正夫

【入選】 8点

記録的猛暑の日々も益こせば季違とぎたかはずに虫の音を聞
く
石坂 作次

【入選】 7点

ちちははの強き遺伝子受け継ぎて日々を生き生き
目指すは百歳
杉木 輝夫

【入選】 7点

遠き日のダムに沈みし村の名を偲ぶ湖畔にオミナ
エシ咲く
眞庭 義夫

【入選】 6点

この歳になれば解ると語りいし母を偲びて病む膝
さする
手塚 光子

【入選】 6点

風ひとつ通り抜ければ色づいて秋がはじまる音の
する朝
篠原 香代

【入選】 6点

バス停に父の出稼ぎ送りいぬ車窓手を振る初霜の
朝
原澤 朝則

【入選】 5点

手ぬぐひにめだか掬すくひし日も遙か川底さらふ重機
音聞く
荒木 洋子

【入選】 5点

米作り初挑戦の息子へと夫はかけやる無理をする
など
澁谷 典子

【入選】 4点

星流る戦禍の街に色失せし瓦礫に覗く赤きサンダ
ル
遠藤 長代

【入選】 4点

牧水の歌いしみなかみ吾が町に文化の火種起こし
て去りし
野澤 武

【入選】 4点

山裾に霧立ちこめる稔り田の稲穂しなだる雨に打
たれて
佐藤 静代

【入選】 4点

旅立ちし人の窓には明かりなく白き障子に映る影
なし
奥村 清美

【入選】 4点

レシートは見つからなくて指に付くバックの底で
溶けたあめ玉
田中 春枝

【入選】 4点

はいどうぞ！賞味期限は二分ですさつと置かれた
熱々きんば
本多 寿美枝

【入選】 4点

数日を臥して浴びたる朝風に生れ変はれたやうな
安らぎ
眞庭 ヨシ子

【入選】 4点

時雨どき虹の袂を巡りゆく歌読む人の影を踏みつ
つ
小林 恵美子

【入選】 4点

見上げれば満天の星またたけり孤独ではないすべ
て友なり
翠 華

【入選】 4点

人いなく今だと撮った一枚に写る「ここで立ち止
まらないで」
金子 美由紀

【入選】 4点

秋さやか進むに遅きかたつむり生きるあかしを樹
肌に曳けり
久野 とし華

【以下、投稿順に掲載】

- 1 熊避けて散歩の時間早くする秋の陽浴びて紅葉眺めつ 原澤 芳雄
- 2 大谷と山本佐々木トリオにてWBC見事制覇す 原澤 芳雄
- 3 秋空に岳の尖り聳え立つ錦秋の山麓にしたがえ 原澤 芳雄
- 4 小春日や弓友揃い弓を引く的を射る音空にひびかせ 原澤 芳雄
- 5 今盛り紅葉芒眺めつつ馬曲温泉露天湯に入る 原澤 芳雄
- 6 夕やけに孤独の今をしみじみと時代に生きて心やぶれし 小野 朝耶
- 7 娘からとどいた包に心はおどるなみだであけて追憶に入る 小野 朝耶
- 8 晩秋の薄紫の空に見た妻の面影心かなしく 小野 朝耶
- 9 晩秋の暮れゆく空に鳥帰る墨絵の如くぬりつぶされし 小野 朝耶
- 10 秋深し谷川岳も朱に映えて平和の光いつまでもとどけ 小野 朝耶
- 11 三日月と共に暮れゆく秋一日熊の逆襲いかに治めむ 中島 早苗
- 12 たちまちに山粧ひてあでやかに老いゆゑ冬の憂ひ掠める 中島 早苗
- 13 朝日さす時雨の山の淡き虹小さき幸せ吐息 こぼるる 中島 早苗
- 14 立冬を過ぎし畑に紋白蝶ひらひら舞ふも儂く愛し 中島 早苗
- 15 玉手箱開けしや見舞ふ瘦せし身にやがて溢るる兄への思ひ 中島 早苗
- 16 ゆく秋の男体山は眠り染み木立の美しく神在すさまに 林 恵美子
- 17 老いづきてデイサービスのお試し日かすかな悦び一步ふみ出す 林 恵美子
- 18 岳しぐれ雲に隠れておくりもの里にくつきり虹のかけ橋 林 恵美子
- 19 わが条件みたすは難し服選び帯に短し襷に長し 林 恵美子
- 20 老人にルーズソックスこそよけれ亡父言ひしこと今よくわかる 林 恵美子
- 21 碧天へ飛びだすばかりに枝揚げはんでん木の大樹の黄葉 三池 幸子
- 22 紅葉をかき分け走る渡良瀬の銅山の跡かいま見えたり 三池 幸子
- 23 亡母揃ふ手つかずの着物いかにせん絹の光はおとろえもせぬを 三池 幸子
- 24 漢方の草木染めにも使われて淡き色合ひ香りかすかに 三池 幸子
- 25 熊騒動しばし籠る日光射し山はいつしか黄金色に 三池 幸子
- 26 ちちはの強き遺伝子受け継ぎて日々を生き生き目指すは百歳 杉木 輝夫
- 27 桃色の山茶花これぞ母の色岳の寒風受けて綻ぶ 杉木 輝夫
- 28 近未来日本の四季は二季となる春秋消えて冬夏とならん 杉木 輝夫
- 29 国会はオール野党の兆しなり結構住み良い国になるかも 杉木 輝夫
- 30 連日のテレビニュースの熊被害人を畏れぬ熊恐しや 杉木 輝夫
- 31 実るほど熊の餌食の柿大樹山に実りのなきが運命に 遠藤 長代
- 32 星流る戦禍の街に色失せし瓦礫に覗く赤きサンダル 遠藤 長代
- 33 蝦夷の地にオーロラ生れし時ありと振り向く西に茜広がる 遠藤 長代
- 34 妻に云う最後の「嘘」になるだろうもうすぐ家に帰れるからな 石崎 正次
- 35 短歌詠めず行き詰りし夜煩について「考える人」を炬燵で真似る 石崎 正次
- 36 満月に少し足らずの月が出て完璧な人なきと想へり 石崎 正次

- 37 うだるよう暑さの日々が嘘の如彼岸に入りて秋風のたつ 石坂 作次
- 38 **記録的猛暑の日々も益こせば季違ずに虫の音を聞く** 石坂 作次
- 39 腕ほどの枝おられをり柿の木に熊の脅威を肌身を感じる 石坂 作次
- 40 拾いきて秋の味覚をなつかしみ艶あざやかな栗皮をむく 石坂 作次
- 41 天高く稲穂稔りて豊の秋太々神楽柱にひびけり 石坂 作次
- 42 米の券うちはいらぬ先祖から命つないだ今があるから 野澤 武
- 43 **牧水の歌いしみなかみ吾が町に文化の火種起こして去りし** 野澤 武
- 44 一人旅みなかみハートのお駄賃で牧水陰と酒を酌み合う 野澤 武
- 45 昔見た尾瀬の川原の草紅葉鳩待峠の若やく妻と 野澤 武
- 46 初心者的小鸟ゴルフの羽根が飛ぶマツトを友にあきた顔で 野澤 武
- 47 林道を汗拭き登り見入るのは白き山百合大きな花や 佐藤 静江
- 48 教え子と会話弾んで箸止まり茹でた蕎麦ものびてしまぬ 佐藤 静江
- 49 春寒に急逝し姉見られずも育て来た花咲き誇る庭 佐藤 静江
- 50 雪だるまはしゃぎて作りし孫娘帰つた後の庭の静けさ 佐藤 静江
- 51 卒寿なる知人の歌集読みながら日々の暮らしや心情思う 佐藤 静江
- 52 母熊は畏にかゝりし子熊をば助け出そうとその場離れず 長浜 利子
- 53 友の家防犯カメラが何台かそれが気になり行くのをためらふ 長浜 利子
- 54 餌無くて熊の胃袋ろ空っぽで寒さが来ても冬眠出来ぬ 長浜 利子
- 55 亀虫が我家で冬眠したそふに窓のガラスに張り付いて居る 長浜 利子
- 56 猛暑去りいよいよ散歩出来るかとこんどは熊で足腰弱る 長浜 利子
- 57 少子化で閉校なりし学び舎に運動会の声はさみしき 番場 正夫
- 58 自然こそ町の誇りと思いつも子等をおもえば熊は恐ろし 番場 正夫
- 59 刈田にて天地返しの耕運機虫狙う鳥ピタリ寄り添う 番場 正夫
- 60 乗り鉄に呑み鉄運ぶSLを今や遅しと待ちぬ撮り鉄 番場 正夫
- 61 **学び舎の最後となりし運動会少子化の波母校呑み込む** 番場 正夫
- 62 故郷の秋祭りの日母作る新米の寿司なつかしき味 小林 博子
- 63 金色の波の上へを行く遊覧船松島湾の波は静けし 小林 博子
- 64 真夏日と言はれる日々を耐へてきて迎ふる今日は夫の三回忌 小林 博子
- 65 苗植ゑて思い出すのは在りし日の広き畑の夫の笑顔ぞ 小林 博子
- 66 気兼ねなく気負いもなくてのんびりと一人の住まい家猫二匹と 小林 博子
- 67 峠道稜線近く迫り来る送電線の撓たむみて続く 佐藤 静代
- 68 廃レール草の茂りて跡形なく戯れ舞うは黄蝶二羽のみ 佐藤 静代
- 69 民生員一人住まいの確認に心配事は熊と答えり 佐藤 静代
- 70 **山裾に霧立ちこめる稔り田の稲穂しなだる雨に打たれて** 佐藤 静代
- 71 八十年戦前戦後の知らぬこと流されぬよう知るようにして 佐藤 静代
- 72 猛暑なる夏を連れ行くちぎれ雲唐突にくる秋の気配に 手塚 光子

73	吾が学歴詐称するにも余地はなし勤勞奉仕に送りし時代	手塚	光子	91	深む秋明るく点 ^{とも} る病室のひたすら祈った遠い日のこと	増田	津恵
74	胸の内語りつくせる幼な友気付けば共に卒寿迎えし	手塚	光子	92	動画にはいつも無邪気な三兄弟跳びはね追いかけて元気に遊ぶ	奥村	清美
75	遺影にはこれがいいかと軽く言い合う金婚式の写真ながめて	手塚	光子	93	今日もまた熊の目撃通知あり驚威の去る日いつになるのか	奥村	清美
76	この歳になれば解ると語りいし母を偲びて病む膝さする	手塚	光子	94	椅子型のこたつに替えて立ち居するベッドを使うも良きかと思う	奥村	清美
77	遠き日のダムに沈みし村の名を偲ぶ湖畔にオミナエシ咲く	眞庭	義夫	95	旅立ちし人の窓には明かりなく白き障子に映る影なし	奥村	清美
78	山の道ゆけば名のなき滝ありてかたえに野菊のつつましく咲く	眞庭	義夫	96	もうとまだ八十四の年を聞きどちらを思うか人もそれぞれ	奥村	清美
79	谷川岳に花の季 ^{とき} すぎもみじ葉のはやも彩 ^{いろ} もつ秋の立つ日を	眞庭	義夫	97	夏の日にガラガラのバス並んだね次はあるのかわからぬままに	イマミツ	
80	高原の名をもつ駅に吹く風ははやも秋なり白き雲浮く	眞庭	義夫	98	勝負際十八回のブルペンで覚悟を纏う青の18	イマミツ	
81	徘徊 ^{徘徊} の熊に注意の報せあり散歩の道に柿の実熟れる	眞庭	義夫	99	三食目味の染たるけんちんを一人こたつで食べる土曜日	イマミツ	
82	知らない人だったかしらと振り返るおじぎして又生れるほほえみ	角田	勝子	100	病室のベッドサイドで笑い合う二十年目の家族団欒	イマミツ	
83	一分間共有したくて電話する夕陽の沈むまでの一瞬	角田	勝子	101	坂登りドクドク響く心臓が足を止めるとやたらに騒ぐ	イマミツ	
84	夕刻の寺に流るるヴァイオリンいつしか星も空で奏でて	角田	勝子	102	レシートは見つからなくて指に付くバックの底で溶けたあめ玉	田中	春枝
85	ばらばらと金木犀が散り始め石路の葉が受け皿となる今	角田	勝子	103	義兄さんは足の付け根に人工の関節入れたターミネーター	田中	春枝
86	一つずつ七つの色を言えるほど美 ^は しき虹立つ秋の夕暮れ	角田	勝子	104	つまづいて転んだ先に赤トンボ止まっついても季節は移る	田中	春枝
87	訪なえば友は留守なりさざん花咲きししおどしの音唐突にする	増田	津恵	105	こしあん派粒あん派とかあるらしいおはぎだったら貴方はどちら	田中	春枝
88	雄々しくも初冠雪の二つ耳暮れゝば赤々と夕焼けの中	増田	津恵	106	庭にある柿の収穫始めると二羽のカラスは声高く鳴く	田中	春枝
89	霜降る夜ひとり静かに想ひ出す花に埋れて逝った人たち	増田	津恵	107	里芋の葉っぱの上に朝露がキラリと光り秋を知らせる	宮崎	りえ子
90	月食で月隠れしその直後浮かび上った満天の星	増田	津恵	108	大根葉油で炒め甘辛く収穫の日の農家のおかず	宮崎	りえ子

- 109 今年の菜蝶は入らず穴もない遂にやったぞ長年の知恵 宮崎 りえ子
- 110 ジリジリと照りつける中吹く風に持ち上げる鍬軽やかに切る 宮崎 りえ子
- 111 姉の舞い胸に刻んで空仰ぐ今日という日の光を抱いて 宮崎 りえ子
- 112 美容師で姉の介護と犬の世話いつも明るい私の天使 小林 はつ江
- 113 忙しく活躍している福の神私にくれた赤いシクラメン 小林 はつ江
- 114 赤飯をリュックにつめて実家へと姉妹で集う電車に乗って 小林 はつ江
- 115 妹よ離れて暮らすもどかさ幸多かれと今日も祈ってる 小林 はつ江
- 116 年の離れた妹よそばにいて昼夜働く身体が心配 小林 はつ江
- 117 はじめての美容院にて絶妙に許容できないボブになる夢 岡本 有未
- 118 ポケットが五六個はある作業着の臀部あたりがまだ乾かない 岡本 有未
- 119 一年に一度のミスタードーナツ箱の中には切なさがある 岡本 有未
- 120 お風呂場に How many hairs? 流されて絡まり合ってきた作品 岡本 有未
- 121 右上を見るか閉じるか定まらぬ視線の先の歯科衛生士 岡本 有未
- 122 どす黒い雲高波になってゆき冬将軍がまたやって来た 本多 寿美枝
- 123 **はいどうぞ！賞味期限は二分ですさつと置かれた熱々きんば** 本多 寿美枝
- 124 木の葉舞う上野の森の銅像は百円入れたらウインクしてた 本多 寿美枝
- 125 暗闇を今夜もトコトコ走る影座敷わらしは目をそらして行く 本多 寿美枝
- 126 誰も乗らないバスは行く垂れた稲穂が広がる先を 本多 寿美枝
- 127 親も子も孫もひたすらタブレット虫の音聞かず月夜も知らず 田村 鶴江
- 128 一瞬を稲妻青き落雷の正に火柱宙より降る 田村 鶴江
- 129 おみやげの大き木通の紫に食べるを惜しみつ種を蒔きたり 田村 鶴江
- 130 熊の餌の柿の木すべて切り倒し身を寄す子の家安堵覚える 田村 鶴江
- 131 花水木南天小柿梅もどき熊の好みや辺り窺う 田村 鶴江
- 132 新しき日本は走り始めた初的女性総理誕生 林 好一
- 133 杖に身を預けて歩くこの辛さ短き秋の去りし音なり 林 好一
- 134 大鉢の金の生る木を取り入れし今朝つぼみ有り確認す 林 好一
- 135 おくやみ欄ふと見れば年下の人友の名のありて 林 好一
- 136 久しくも坤六峠夢に見し紅葉の山を独り歩いて 林 好一
- 137 吹き荒ぶ風の道とふわが峽に抗ふ術なく半世紀住む 荒木 洋子
- 138 **手ぬぐひにめだか掬ひし日も遙か川底さらふ重機音聞く** 荒木 洋子
- 139 突風に飛びたる帽子転がりて追ひつ追ひかけ峽に遊べり 荒木 洋子
- 140 石倉を車窓に見れば懐かしき逢ふたことなき曾祖母の在所 荒木 洋子
- 141 冬の日の夕陽傾く利根川の流れに揺るる松の影見ゆ 荒木 洋子
- 142 今の世をるいるい続く戦あと戦国時代を今に身にしむ 眞庭 ヨシ子
- 143 **数日を臥して浴びたる朝風に生れ変はれたやうな安らぎ** 眞庭 ヨシ子
- 144 遠山の枯野のすすきひとところ陽に燃ゆるやに終を盛りぬ 眞庭 ヨシ子

- 145 少年から生ひ立つ姿面に出し大谷翔平日本を沸す 眞庭 ヨシ子
- 146 耳二つ姿見えねど谷川岳白さ際立つ初雪の早や 眞庭 ヨシ子
- 147 「はじめてです」赤蕎麦の花手に取りて香りを確かむ奥田亡羊 篠原 香代
- 148 猿ヶ京新治村と晶子詠む町の名かわり二十歳迎える 篠原 香代
- 149 風ひとつ通り抜ければ色づいて秋がはじまる音のする朝 篠原 香代
- 150 〇のつく歳には何かしたくなる何故か無謀ということばかりを 篠原 香代
- 151 全力で駆け抜けてきたそのあとに静かにひかりを追ってゆく朝 篠原 香代
- 152 就活や内定でたと報す孫 新米りんご便りを添える 澁谷 典子
- 153 四季の歌会うと歌った三姉妹独りとなりて四季を案ずる 澁谷 典子
- 154 初挑戦吾子懸命に田を守り鎌上げ行事響く拍手 澁谷 典子
- 155 久々の秋の陽差しに招かれて藁アート待つたくみの里へ 澁谷 典子
- 156 米作り初挑戦の息子へと夫はかけやる無理をするなど 澁谷 典子
- 157 玉の出来見つめ続けるコンニャク掘り空の青さも紅葉も見えず 原澤 廣子
- 158 熊騒ぎ通学の子等に歩み寄る目を丸くして急ぎ足となり 原澤 廣子
- 159 ババ友の誕生会の集いでは一品持ち寄りはなし満開 原澤 廣子
- 160 赤々と血の透き通る赤々とよちよち歩きの幼な子の君 原澤 廣子
- 161 三国路を老翁二人は酒求め越の蔵元女将訪ねぬ 原澤 朝則
- 162 白濁の万座の湯船に一片の紅葉浮かびぬ霜林の風 原澤 朝則
- 163 豪風に弱竹暴れ曲がれども折れぬ節持ち強く在たし 原澤 朝則
- 164 杖落す瘦せた老婆の車椅子聞けば涙の戦中戦後 原澤 朝則
- 165 バス停に父の出稼ぎ送りいぬ車窓手を振る初霜の朝 原澤 朝則
- 166 迎え火を焚きし夜には亡き義父の気配感じる夕げとなりぬ 吉田 まゆみ
- 167 雨の日はアイロンかけがスムーズで苦手な作業も手短にすむ 吉田 まゆみ
- 168 休憩に出された菓子のそれぞれが話し出したら食べられないね 吉田 まゆみ
- 169 刺し身の下に敷いてある薄い物「ドラキュラマット」と名前のあるらし 吉田 まゆみ
- 170 赤い体に七つ星 草なかの君は先までせかせかのぼる 吉田 まゆみ
- 171 山じゃなくフレッセイにて熊に遭うトラウマになり買い物行けず 大山 真紀枝
- 172 これがあのウォーカーズハイ軽やかに歩み続ける右左右 大山 真紀枝
- 173 道端の松ぼつくりのとなりにはよく似た色のうんちがひとつ 大山 真紀枝
- 174 人参とカラムーチョとマヨネーズ合わせるだけで立派なサラダ 大山 真紀枝
- 175 秋晴れに真つ赤なもみじ目もくれずひたすら歩きポケモンゲット 大山 真紀枝
- 176 静寂につつまれる朝キツツキは気を付けしつ々突つきつづける 大山 智也
- 177 国道の気温表示の数字見て冬の到来嫌でも感じる 大山 智也
- 178 重そうに垂れている枝 付いている柿ひとつだけ畏かのように 大山 智也
- 179 木枯らしが吹く水の抜かれたプール今は落ち葉が戯れている 大山 智也
- 180 「二番線…」無人の駅のアナウンス都会の駅と同じ口調で 大山 智也

198	ラフ画にてましろかる火は薄墨に揺る若沖の雄鶏の冠	山崎 杜人
197	近くには映画館なく国宝と言ふ小説を送りくる子は	関 和子
196	一人ならなんでも好きに昼食は焼芋にしてシルクスイート	関 和子
195	思わぬに夜半過ぎに見る西空はスーパームーン東は曇り	関 和子
194	今朝もまた白衣観音拝みつつ都へ向う通勤列車	翠 華
193	山里はさみしく暮れるかそなれば点す灯りもちらりほらりと	翠 華
192	見上げれば満天の星またたけり孤独ではないすべて友なり	翠 華
191	猪ししも狸も熊ものら猫もみんな此の世の旅の仲間よ	翠 華
190	三国路の谷の紅葉に魅せられて夕暮の径行きつもどりつ	翠 華
189	藤原の湖に向ひて慰霊碑たつ若者二十名悲しき名前	石坂 喜美江
188	久方に枯葉散り敷く藤原を訪ひて思ふどこかなつかし	石坂 喜美江
187	知り合ひのひとは犬の散歩中熊に襲われ恐ろしさ語る	石坂 喜美江
186	わが峽は連日熊の出没と被害の報にて籠り入る日日	石坂 喜美江
185	冷えた手を繋いだ先になごり雪蠟梅こぼれて足跡ふたつ	小林 恵美子
184	みなかみの水上たるは蒼と水時の地層に我也染み入る	小林 恵美子
183	小さな手空をもぎ取りほおばれば未知の世界を味見している	小林 恵美子
182	時雨どき虹の袂を巡りゆく歌読む人の影を踏みつつ	小林 恵美子
181	君といた 思い出すのは小さごといつも飲んでた薄い珈琲	小林 恵美子
199	冬となり無臭深まる樟は寢息のように日を零しおり	山崎 杜人
200	思いだせないゆめの続きにペリ工をそそげば青梅の浮き沈む	山崎 杜人
201	半化粧のちさき緑のちさき時 腕時計をわが影に重ねつ	山崎 杜人
202	あお空の骨壺に月の喉仏を容れて晩夏のかあさんがいる	山崎 杜人
203	足長に写ると言われ膝伸ばし靴の中でもつま先がピン	金子 美由紀
204	旅先で地酒舐め舐め指を折り牧水気取りでもう一酒 <small>いっしゅ</small>	金子 美由紀
205	人いなく今だと撮った一枚に写る「ここで立ち止まらないで」	金子 美由紀
206	吊り橋を揺らす二人は樂しげで遠慮がちにヒヤアと零す	金子 美由紀
207	街灯の下牛井喰う二人医者帰りの車の中で	金子 美由紀
208	出沒者秋に獲物をたくわえる人は警戒鈴とスプレー	篠原 忠
209	熊かもと家を出る時電灯をこないでこないでびくびく歩く	篠原 忠
210	父親にテレビの音量でかいよと 怒るように分かった分かった	篠原 忠
211	石歩きナイアガラ観て人々がもみじは赤くすてきな景色	篠原 忠
212	米価格下げる予定でお米券価値上がつてく品種改良	篠原 忠
213	秋さやか進むに遅きかたつむり生きるあかしを樹肌に曳けり	久野 とし華
214	沢の音やがてほそりてたよりのなき山の実りをたくしたくても	久野 とし華
215	QRやつと読み取り注文しAI猫にお礼を告げる	加藤 南風
216	入店時タッチ場面で急かされて注文し過ぎ席タブレット	加藤 南風

- 234 澄んだ空山際錦の校庭に気付けないんだスタートライン 加藤 南風
- 233 無私の人マンション詩人喋るアリゾナラジオで本と出会う 加藤 南風
- 232 没頭の時間の流れ急かさなない大人の粋な計らいあれば 加藤 南風
- 231 売られたる子牛を呼びびて親牛は梅雨の一夜を鳴き明かすなり 菜 花
- 230 休耕田色良く咲けりコスモスの色良く咲きて夏も終りぬ 菜 花
- 229 さし芽する菊花をくれし友の居て早くも花の咲きたる事のうれしく 菜 花
- 228 昼顔のあさがおの花手すり迄つぼみを数ぞう朝の日課に 菜 花
- 227 野焼きする農婦の姿腰曲り大変そうなり田の畔に立つ 大川 美知子
- 226 きやら露の程良く煮えて日暮なり小袋に分け冷凍保存す 大川 美知子
- 225 九十の母の車椅子ゆるり押す弟の白髪頭ちくる七回忌 大川 美知子
- 224 知りそめし人と語らう一時も窓の外には秋雨の降る 大川 美知子
- 223 信号機冷たく濡れて秋雨にずっとたたずみ吾待つと言う 大川 美知子
- 222 移住して約半世紀この町の空気と水が我に染みつく ベネット 昭子
- 221 冬ソナの再放送が始まりてあのときめきが再燃焼する ベネット 昭子
- 220 こんなにちわどちら様かと名も訊けず話合わせる自分が可笑しい ベネット 昭子
- 219 口すすぎ顔をあらいて四方拝やさしき父よ今は天から 高橋 スミエ
- 218 石つてばばかりとうきくるカジカ魚はおいしくやいて昔のたんぼく元 高橋 スミエ
- 217 つきよのの校庭しづかまぼろしか友とおどりし月夜野おんどう 高橋 スミエ
- 241 初音なり けきよけきよにほうほうほけと応へればけきよと逃げたり 高橋 スミエ
- 240 皆たつしや子供に孫にひ孫ありすぎし苦勞も今はしあわせ 高橋 スミエ
- 239 キチヨウメンそんな文字つてどんな文字卒業文集をひっぱりだす 小室 史
- 238 これからは一人気ままに生きると決めてなみなみと注ぐ酒潔く 小室 史
- 237 眠らねば思えば思うほど寝れぬループの中でああ朝がきた 小室 史
- 236 年寄りをバカにするなよ愚かも未来の自分がそこにいるのに 小室 史
- 235 鳥の目になつて世界を俯瞰する小さな煩粉々になる 小室 史

第六回みなかみ町俳句短歌大会作品集

令和7年12月21日 発行

編集／発行 みなかみ町教育委員会生涯学習課

〒379 | 1305

群馬県利根郡みなかみ町後閑321番地1

みなかみ町中央公民館内

電話 0278(25)5025